マキアヴェリを読む

今日マキアヴェリの名前は、人の耳に心地よく響くというわけではない。「マキアヴェリスト」とはほめ言葉ではなく、非難の言葉と言える。ちなみに広辞苑で引いてみると、マキアヴェリズムとは「目的の為に手段を選ばない権力的統治様式。権謀術数主義」と書いてある。これでは人に好まれるはずもない。

人の名前にイズムがつく言葉はそれほど多いわけではない。マキアヴェリズムならマキアヴェリ思想なり主義と訳せる。その人の思想、主張が社会に大きな影響を与え、その思想を信奉する多数の人が存在した時、このように表現するのが常である。また、この辺の受けを狙って、○○イズムと自ら主張する人もいる。自分で出版した本を自分の配下に書店で買わせて、新聞のベストセラー番付に出すやり口と同じようなものだ。マスプロ化した現代ではこういった事もありうる。しかし、マキアヴェリはルネサンス期、イタリアは フィレンツェの人である。

ニッコロ・マキアヴェリは一四六九年、弁護士ベルナルド・マキアヴェリの長男として生まれた。ルネッサンス期というと「暗黒の中世」が終わり、「近代の黎明」のような明るいイメージがある。しかもその渦中のイタリアはフィレンツェである。

しかし近年の研究によれば、必ずしもそのようなものではなく、政治的、社会的には混乱を極めていた。新しい文学、芸術が噴出した感のあるルネッサンスであるが、当時のイタリア半島は、南はナポリ王国、ローマを中心にローマ教皇領、その北にシェナ共和国、フィレンツェ共和国、ジェノヴァ共和国、ヴェネツィア共和国、ミラノ公国と小国に分立し、都市国家同士の争い、その内部での権力闘争。それに乗じたフランス、スペインなど外国勢力の軍事干渉が重なり、大混乱の時代であったのだ。

その時代、マキアヴェリはフィレンツェ共和国書記官として働いた。

その経験の中で権力の獲得と維持の方法論を書いたものが、代表作「君主論」である。

「君主権には支配者の血統が長い間君主である世襲的君主権と新しい君主権がある。…また、領土を獲得する方法には他人の軍隊による場合、自らの軍隊による場合、幸運による場合、実力による場合がある。」

「ところで幸運によってではなく、自らの実力によって君主となった人々の中で、最も卓抜な存在としてはモーゼ、キュロス、ロムルス、テセウス等が挙げられる。」

「支配権が長い間連綿とつづくところでは、革新の記憶も理由も消滅する。それというのも一つの変革は次の変革を招くような手がかりを残すものだからである。」

「かくして新君主はこの権力獲得の過程で傷つけた全ての人々を敵にまわすことになり…」

代表取締役社長
鈴木英介



「経験によれば信義の事など全く眼中になく、狡知によって人々の頭脳を欺く事を知っていた君主こそ今日偉業をなしている。」

「教会の支配権の獲得は能力か幸運によるものであるが、維持するに際してどちらも必要としないのである。この支配権は宗教上の古い制度に支えられており…」

「このように聖職者たちの野心から無秩序と貴族たちの間の紛争が発生したのであった。」

「今日のイタリアの破滅の原因は、ほかならぬ傭兵隊に長い間頼ってきた点に求められる。」

フィレンツェ政庁におけるマキャヴェリの最大の仕事は「ピサ問題」であった。フィレンツェの支配下にあったピサは一四九四年、仏王シャルルの軍のイタリア侵入に呼応してフィレンツェからの独立を果たした。そして、仏軍撤退後フィレンツェとピサは戦争状態が続いていたのだ。

当時、フィレンツェも傭兵に頼っていた。しかし、ピサ戦争における傭兵の裏切りを契機とし、マキャヴェリは貴族の反対を押し切り、市民軍創設に力を入れる。そして、この軍は一五〇九年ついにピサを屈服せしめたのだった。しかし、一五一二年フィレンツェ市民軍は侵入してきたイスパニア軍に敗れる。フィレンツェの指導者であったソデリーニは亡命を余儀なくされ、フィレンツェはイスパニア軍の指導者であったソデリーニは亡命を後ろ盾とするメディチ家とそれと通謀する貴族たちの手に帰す事になった。

その結果マキャヴェリは全ての役職から解任され、フィレンツェから追放された。

「君主論」はこの間に書かれる事となる。

マキャヴェリに対する悪罵は、現代に始まったものではない。この時、一五一二年のフィレンツェ市民軍の敗北から始まったのであった。

市民軍創設の立役者であった事により、貴族と傭兵の敵であったマキャヴェリは、この君主論によって、全ての君主を敵に回すことになった。さらには予言者モーゼをペルシャ王キュロスや、ローマ建国の英雄ロムロス、アテネのテセウスなど異教徒と同列に論じ、聖職者も議論の俎上に乗せた事でキリスト教会からも憎まれた。

それに対して、マキャヴェリの論はどのような価値観も主張せず、未来を予言する事がないがゆえに、誰一人支持する者はなかったのだ。

つまり、マキャヴェリズムの言葉は彼を支持する者から付けられた名ではなく、それに反対し、あるいは自らの反対者を落としめる目的で利用するために命名されたものであった。

政治的真実が人々の支持を得ることは、今も昔も難しい。人はにがい現実よりも、あまい夢を聞きたがるものだからである。

今日、フィレンツェ、サンタクローチェ寺院にあるマキャヴェリの墓碑には「その非常な名声にふさわしい賛辞を受けなかった人」と刻まれている。

最後にこの「君主論」の中の有名な言葉を記しておきたい。

「武装した予言者は勝利をし、武器なき予言者は破滅する」

もし、フィレンツェにおける市民の武装が完了したら、マキャヴェリは未来を語ったかもしれないと思うからである。

（「君主論」は講談社学術文庫によった）